

選ばれし者の矜持

Noblesse  
oblige

» 4

**国** 際協力に関して、日本は以前より心が響く人たちが増えてきているように思っています。関心がない人との二極分化という面はありますが、特に若い人たちは感覚がいい。企業の社会貢献活動も、最近では本業と関係ある形や、本業の専門をそのまま活用してくださる形での貢献が増えていきます。社員を難民支援の現場に派遣し、帰国後に社員研修やモチベーションアップにつなげるなど、視野を広める体験ととらえ、寄付するだけではない、国際協力と企業や社員との循環を考える企業が多くなりました。日本では難民支援というと、遠い国の出来事のように感じる人もいますが、いつ自分が難民の立場になるかわかりません。お互いさまで。それに支援というのとは一方ではなく、むしろ難民を受け入れ国の人、受け入れコミュニティから学ぶことのほうがずっと多

## 根本かおる

ねもと・かおる ● 日本UNHCR協会事務局長。  
兵庫県出身。東京大学法学部卒業後、テレビ局にアナウンサーとして入社。専門分野を持つ必要性を感じ、94年、米国コロンビア大学大学院に留学。難民法などを学ぶ。96年に退職しUNHCR(国連難民高等弁務官事務所)へ。トルコ、コソボ、ジュネーブ本部、ネパール事務所などでの活動を経て、07年6月から現職に。国連が定めた「世界難民の日」にあたる6月20日から同月27日まで、難民にまつわる映画を上映する「難民映画祭」を開催。イベント情報、国連の難民支援活動への協力方法など、詳細はホームページで。  
<http://www.japanforunhcr.org/>

## 多様性ある価値観が世界を救う

い。支援というのはお互いWinner inな形でないと長続きしません。日本UNHCR協会は、UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)を民間から支える日本の公式支援窓口として活動しています。けれども、UNHCRの活動資金は、国連が予算をつけてくれるわけではありません。各国・民間企業など一つひとつに難民の現状やニーズを伝えて応援をお願いし、納得して出してくださったお金で成り立っています。ですから、活動資金は私たちがとって血液みたいなもの。思いを共有し、お金の面で応援していただくことは、実際に現地に入って難民問題や人道問題に携わることと同じくらい、支援活動につながっています。

それから、日本国内にいる難民の人々にも目を向けていただきたい。多くの先進国が毎年数千人を受け入れている一方で、日本では過去、インドシナ難民を1万1000人受け入れた以外、難民条約に加盟してから25年以上になりますが、わずか450人程度と非常に少ないのです。

アインシュタインや孫文も難民であつたように、難民は紛争に巻き込まれてすべてを失ったかわいそうな人たちというだけではありません。彼らを持っている才能や可能性を日本で発揮してもらえないという、難民受け入れのポジティブな面にもっと目を向けてほしいなと思います。大切にされれば難民は必ず恩を返してくれます。それは日本のファンを作ることにもなります。

目の前で困っている難民の支援はもちろんですが、本当の解決策は、立場の違う人々を尊重し合い、いいところを見て、お互いにポジティブなものを引き出す。その多様性が世界に広がれば、紛争は起こらないし、難民もなくなると思っています。(談)